

国語科授業案：
教科で育みたい人間像「豊かな言語感覚をもつ人」

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学教育学部附属静岡中学校 公開日: 2024-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 若林, 卓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/0002000475

国語科授業案

教科で育みたい人間像 「豊かな言語感覚をもつ人」

授業者 若林 卓

1 日時 令和5年11月2日(木) 第2時 11:30~12:20

2 学級 2年C組 (2年C組教室)

3 題材名 「言葉」を見つめる

— 「見ること」と「言葉」の関係性を考えること、映画の音声ガイド制作を通して—

4 本題材で願う学び

「見ること」と「言葉」の関係性について自分なりの考えをもち、伝えたいことを表現するためにこだわりをもってじっくりと言葉を吟味し、それらを往還することを通して、「言葉」に対する見方や考え方を豊かにしていくこと。

(学習指導要領との関連：〔思考力、判断力、表現力〕B(1)ウ、エ、C(1)イ、オ)

5 これまでの子どもの学び

これまで子どもたちは、題材と出会い、言葉の世界に浸りながら、自分の考えをつくりあげていくことを繰り返すことで、以下のような学びを積み重ねてきた。

一つめは、言語感覚を磨いていくことである。芥川龍之介『トロッコ』(1年時)の題材では、子どもたちは、「なぜ良平はそのときを思い出すのか」という追求テーマをもとに追求をすすめていく中で、「良平が思い出すそのときとはいつか」という問いを生み、二つの時のつながりに着目しながら、読みを深めていった。追求していく過程で、初読では気にも留めなかった描写にも丁寧に目を向け、その言葉の意味を考えたり、作者がその言葉を施した意図を考えたりしていった。また、仲間とともに語り合うことで、一つの言葉に対する解釈が人によって異なることを実感し、それを伝え合うことで、再び自分の解釈と向き合い、自分の解釈を広げたり深めたりしていった。例えば、「断続」を辞書通りの意味としてしか解釈していなかった子どもが、別の子どもの良平の心情の変化と重ね合わせる読みを考えを揺さぶられたり、「道」のもつ意味を人生ととらえ、象徴的に読む考えにふれることで、作品全体の見え方が変わっていったりする姿があった。そのたびに、子どもたちは、自分の読みや考えをもう一度見つめ直し、題材の言葉と何度も向き合い、自分自身の読みを更新させ、自分の考えを変容させながら言語感覚を磨いていった。

二つめは、自らの価値観やものの見方を豊かにしていくことである。ハイムボトク『ゼブラ』(2年時)の題材では、子どもたちは、「ゼブラはなぜ変化したのか」という追求テーマをもとに追求をすすめていく中で、「輪郭ではなく周りの空間を見るとはどういうことか」という問いを生み、言葉のもつ意味と登場人物の変化を関連づけながら考えることで、作品の主題にせまっ

ていった。さらに、題材に描かれている価値観や人々の思いを自分と重ね合わせたり、社会のあり方にまで目を向けたりしていった。例えば、「新しい目で見ること」と「想像力」の関連性について語り合う際、「人の行動を見たままではなく、その意図や思いまで想像して受け取ることがある」や「物や出来事を見るとき、そこに自分なりの補正を加えて見ることがある」など、実際の自分の身のまわりのことや体験と重ね合わせていった。その際、自分と重ね合わせたのちに、改めて主人公はどう受け取ったのかについて語り合いがなされるなど、何度も物語の中と現実とを関連づけながら考え、自らの価値観やものの見方をより豊かにしていった。

そして、このように積み重ねてきた子どもたちの学びについて、授業者が学びをみとってきただけではなく、子どもたち自身も国語を学んでいく価値を次のように実感していった。

- ・僕にとって国語は、「宝探しゲーム」です。自分の考えをもったり、話し合ったりする上で大切になるのが「根拠」です。それが、文章中に散りばめられた「宝」です。自分にとっての国語のおもしろさもここにあり、その散りばめられた「宝」を集め、一つの考えをもったときの達成感はとても大きく、早く発表したいという気持ちになります。
- ・わたしは国語の授業で、「一つの考え方や価値観に縛られてはいけない」ということを学びました。一人で考えると一つの考え方や、とらえ方に縛られてしまいがちでしたが、全体共有をすると、矛盾していたところも他の考え方をすれば筋が通ったり、登場人物の心情の解釈が違ったりと、追求する上でたくさんの気づきがあってとてもおもしろ

かったです。また、心情の解釈が違くと、そのまわりの言葉の解釈も変わってきます。そこもおもしろいと思いました。そして、考え方を考えるだけで自分の世界が大きくなると感じました。

- ・追求はおもしろい反面、実は心が何度か折れかけたこともありました。だけど、自分一人で考えていたらあきらめていただろう追求も、クラスみんなの意見を聞くことで新しい考え方が見つかるのだということを授業の中で何度も感じる事ができました。一人で物語の結末まで読むのが「読書」で、読み終わってから物語について考えるのは「考察」、その考察の内容をみんなに共有し、新しい考え方をを見つけるのが「国語」だと思います。文章は読んだ人によって受け取り方が違うので、誰かとその文章について語り合うことで、新しい考えに出会えるのです！それが国語の醍醐味だと思います。

(学年末のふり返りより)

このように、子どもたちは、言葉と向き合いながら言語感覚を磨いていくこと、自らの価値観やものの見方を豊かにしていくことを、国語の授業の中にある学びの価値として実感しながら学びを積み重ねてきたと言える。

6 題材観

(1) 本題材の価値

①『目の見えない白鳥さんとアートを見に行く』の価値

本書は、川内有緒氏によって書かれたノンフィクション作品である。著者が、全盲の美術鑑賞者である白鳥健司氏とともに美術鑑賞することを通して、感じたことや考えたことがつづられている。わたしたちにとって、日々の生活を送ったり、TV番組や映画を楽しんだりする際に視覚から情報を得ることは意識するまでもない当たり前のことである。それゆえ、「もしも視覚がなかったとしたら」という視点はもち合わせていない。そのような読者が、白鳥さんの美術鑑賞への向き合い方を知ることを通して、以下のような思いや考えをもつことができる。

第一に、「見ること」とはどういうことかについての考えである。「見る」とは視力の問題であると考えがちである。しかし、白鳥さんの美術鑑賞の仕方を知ること、「見る」とは、これまでの過去の経験や記憶といったデータベースを用いて、視覚方法を補正し、見たことを理解していくという脳の問題であると考えられることになる。また、晴眼者でありながら見えていないものがあることにも気づかされる。著者の体験談と

して挙げられている、美術館スタッフがある湖の絵を何年にもわたって、原っぱだと勘違いしていたエピソードがある。今まで見た気になり、わかった気になっていたものが、視覚障害者に言葉で説明することを通して、実はしっかりと見えていなかったことに気づけるのである。読者は、このエピソードを自分たちの身のまわりの出来事と重ね合わせ、「見ること」の難しさと感じた気になっていることを実感する。このように、本書と出会うことで、これまで当たり前に行っていた「見ること」を問い直すことができる。

第二に、「見ること」と「言葉」との関係についても考えを巡らせることになる。白鳥さんは、晴眼者が発する言葉によって「見る」行為を行う。その際、彼は「正しさ」を求めている。さらには、「一直線で正解にたどり着いてしまったらつまらない」とまで述べている。また、視覚障害者と晴眼者が一緒に美術鑑賞することの目的は、正解を探すことや作品イメージをシンクロナイズさせることではなく、見えるもの、見えないもの、わかること、わからないこと、そのすべてを対話によって共有することであると述べている。読者は、「正しさ」を求めているのならば、「言葉」に何を込めればいいのかという疑問を抱いたり、身のまわりのことと重ね合わせたりしながら、「見ること」と「言葉」の関係について考えていくこととなる。

②『目の見えない人は世界をどう見ているのか』の価値

本書は、著者である伊藤亜紗氏が視覚障害者の方たちと対話をする中で、感じたことや考えたことがつづられている。本書と出会うことで、読者は、以下のような思いや考えをもつだろう。

第一に、言葉に「情報」と「意味」の要素があるとはどういうことかということである。著者によれば、「情報」は客観的であり、「意味」は主観的な要素が含まれる。また、言葉を発する側が意図的にどちらかを込めることもあれば、言葉を受け取る側がどちらかとして受け取ることもある。そのような考えにふれることで、読者は、これまでの自分の経験をもとにしながら、言葉の要素や役割について考えていくことになる。

第二に、見えない人が言葉を受け取るとはどういうことかについてである。見えない人は言葉を頼りに推理しながら見ている。受け取った情報をもとに想像し、間違っていたらその都度更新して、柔軟にものごとを見ている。著者はそれを、「他人の目でものを見る」と述べている。読者は、そのときに用いられているものが言葉であることに目を向け、他人の目でものを見ることは、視覚障害者だけでなく、晴眼者である自分たちにも言えることであると気づくことができる。そして、言葉を介して他人の見方を自分のものにする

はどういうことか、見たものを言語化していくとはどうということかについて考えていくこととなる。

③音声ガイドの価値

音声ガイドとは、視覚障害者が絵画鑑賞やTV番組視聴、映画鑑賞をするための音声による作品のガイド（補助的な説明）である。本題材では、映画の音声ガイドを取り上げる。視覚障害者が音声ガイド無しで映画を鑑賞しようとした場合、視覚による情報は取り入れることができないため、セリフ、効果音、BGMのみで映画を鑑賞することになる。当然のことながら、それでは作品を十分に味わうことはできない。そこで音声による補足のガイドがなされる。それは情景であったり、登場人物の表情や視線、行動であったり、登場人物同士の位置関係であったりする。このガイドがあることにより、視覚障害者も映画を楽しめることになる。

音声ガイド制作の第一人者であるシネマ・チュプキ・タバタ代表の平塚千穂子氏は、次のように語っている。「『人生は意味じゃない願望だ』チャップリンの言葉です。「映画を観たい」という気持ち、「一緒に観たい」という想いが、音声ガイドを制作する原動力となりました。身体的な機能だけで見えるか見えないかを問うよりも、その願いが生み出す『想像力』を信じたいと思ったのです。」と。その「想像力」の源となるものが言葉であり、言葉が「一緒に観る」を叶えてくれる存在なのである。

(2) 本題材で願う子どもの姿

本題材で願う子どもの姿は、以下の二つである。

一つめは、文章を読んで自分の考えを形成し、仲間と語り合うことを通して、その考えを広げたり深めた

りしていく姿である。「見ること」を問い直し、「見えるものを言葉にしようとする」ことで本当に見ることが出来る」「視覚障害者も晴眼者も言葉を使ってものを見ている」など、「見ること」と「言葉」の関係性について考えを形成してほしい。また、個人で考えたことをもとに仲間と語り合うことで、さらに考えを広げたり深めたりしてほしい。

二つめは、音声ガイド制作を通して、相手に伝えるための言葉一つ一つにこだわり、言葉をじっくりと吟味する姿である。映画の主題をよみとり、視覚障害者という相手意識をもってそれを伝えるために、「限られた時間の中でどの情報を伝え、どの情報は伝えないか」と試行錯誤したり、「このシーンの躍動感を伝えるにはこの言葉の方がいいかもしれない」と、一度考えてみた言葉が本当にそれでよいのか立ち止まって言葉を見つめ直したりしてほしい。そのとき、文章を読んで語り合ってきたことと音声ガイド制作のために言葉を選ぶことを往還する姿があるだろう。「言葉を通して見るためには、相手が想像できるような言葉選びが必要だ」と、文章を読んで考えたことを言葉選びにつなげたり、言葉選びをしようとする中で、「本当は見えていなかったものが言葉にすることで見えた」と、考えたことを実感したりしてほしい。また、「見えていない人にとっては丁寧な説明が必要だと思っていたが、時と場合によっては、説明しすぎず、余韻を残すことも大切だ」と、これまでの自分の考えを更新したり、考えをより確かなものにしたりしてほしい。

そして、このような姿を重ねていくことで、子どもたちには、言葉に対する見方や考え方を豊かにして欲しいと願っている。

7 題材構想（全15時間）

- ①『目の見えない白鳥さんとアートを見に行く』『目の見えない人は世界をどう見ているのか』を読んだ感想を交流し、追求テーマを決めよう（1～2時）
- ②追求テーマ『『見ること』と『言葉』はどう関係しているのか』について考え、語り合おう（3～5時）
- ③映画の音声ガイドをつくろう（6～13時：本時はその10時）
- ④最終追求をしよう（14～15時）

8 題材構想における授業者の考え

子どもたちは、読むことの実践を多く重ね、つづられた言葉から言語感覚を磨いていく学びを積み重ねてきた。そこで今回は、自らが言葉を使って表現することを通して、「言葉」に対する見方や考え方を豊かにして欲しい。「言葉」に対する見方や考え方が豊かになるとは、言葉には情報だけでなく意味や思いを込めることができるということを実感したり、言葉

選びを大切にすることでまわりに与える影響が大きく変わること気づいたり、自分の感性や言葉の選び方の特徴に気づいたり、言葉を伝える際に大切にすべき要素と向き合ったりすることであると考える。

そこで、子どもたちが願う学びに近づくために、以下のことを大切にしながら本題材を構想した。

(1) 本を読んで語り合ったことをもとに考えること、映画の音声ガイドを制作することをつなげる (①②③)

子どもたちが題材を通して願う学びに近づくためには、音声ガイドを制作すること自体が目的となってしまうようにすることが大切であると考え。なぜならば、それでは、「納得のいくガイドができてよかった」と、成果物のみを目を向けて終わってしまう姿や、「見えているものをとりあえず説明したからこれでよし」と、じっくり言葉と向き合えていない姿が予想されるからである。

そこで、文章を読んで考えることと音声ガイド制作をすることのつながりがある題材構想をした。それにより、考えたことを音声ガイドづくりに生かしたり、音声ガイドづくりを通して考えを更新したりするなど、二つの活動を往還する姿を生み出したい。そうすることで、言葉選びの試行錯誤や言葉のもつ価値の実感など、子どもたちが言葉を見つめる姿が溢れることを期待する。

(2) 本を読んで語り合い、自分の考えをもつ (②)

子どもたちが「言葉」について語り合い、自分の考えをもつからこそ、言葉を選ぶ際の根拠や言葉を吟味することへのこだわりが生まれると考える。そこで、『目の見えない白鳥さんとアートを見に行く』と『目の見えない人は世界をどう見ているのか』を読み、語り合うこととする。同時に二冊の本と出会い、複数人の考え方にふれることで、共通点や相違点に目を向けながら、子どもたちは、「見ること」を問い直し、「見ること」と「言葉」の関係性について考えをもつことができるだろう。

また、この場面において願う姿は、音声ガイド制作に向けて、同一の心得をつくったり、音声ガイド制作のための知識・技能を習得したりする姿ではない。子どもたちには、「見ること」と「言葉」の関係性についての自分なりの考えをもってもらいたい。そのため、子どもたちが自分たちで一つの追求テーマをつくりあげること、その追求テーマをもとに、それぞれの視点で個人追求をし、みんなで語り合うこととしたい。そうすることで、「見ること」と「言葉」の関係性について、子どもたちが自分の考えを広げたり深めたりできるだろう。

(3) 映画の音声ガイドを制作する (③)

自分なりの考えをもった子どもたちが言葉を吟味しなくなる場面を設定するために、映画の音声ガイド制作を行う。映画の音声ガイドを制作しようとする、必然的に、作品の解釈の必要性、見えるものの言語化、

相手意識、時間の制限、音やセリフとのかかわりやタイミングなど、多くの難しさと向き合うこととなる。それは、考えたことをもとにしながら実際に「見ること」をしたり、よりよい「言葉」を選んだりしたいという子どもたちの原動力につながっていくだろう。そして、そこには、言葉にすることの難しさや言葉で伝わることの喜び、言葉のもつ価値への気づきも伴うことになるだろう。普段は言葉にしなくてもよいものを言葉にしようとする、試行錯誤を繰り返しながら、こだわりをもって言葉を吟味する姿があることを期待する。

また、音声ガイド制作中においても、言葉にこだわりたいという子どもたちの思いを引き出すことが大切である。そのため、仲間とかかわり合いながら制作していく場を設けたり、音声ガイド制作者である平塚千穂子氏に、実際に音声ガイドづくりのアドバイスをいただくことや作成した音声ガイドに価値づけをしていただくことのできる場を設けたりしたい。

また、授業者は、子どもたちが「これは本当に鑑賞者にとってよい言葉なのだろうか」「この場面では何を大切にしながら言葉を選ぶのがよいのだろうか」などといった、よりよい言葉を選ぶための思考を引き出すようなかかわりをしていきたい。

(4) 短編映画『陽なたのアオシグレ』を扱う (③)

『陽なたのアオシグレ』は、石田祐康監督による短編アニメ映像作品である。小学4年生の陽なたは、同級生の時雨に好意を抱いている。一緒に小鳥の飼育当番をしながら仲を深めていく二人だったが、ある日、陽なたは、時雨が転校することを知る。時雨が学校を去る日、陽なたは一步を踏み出し、時雨を追いかけるのである。揺れ動く心と向き合いながらも、主人公である陽なたが勇気を出して一步踏み出すという、子どもたちにとってわかりやすく、爽快なストーリーである。

一方で、現実場面と主人公の心の場面の転換、登場人物の細かな表情、鳥たちの躍動感、主人公の心を映し出す情景描写など、いざ言葉にしようすると、難しさを感じる場面がいくつもある。だからこそ、本作品の音声ガイドを作成することに価値があると言える。子どもたちは必然的に、「この情景を伝えるにはどの言葉を用いようか」とよりよい言葉を選ぼうとしたり、「このシーンの躍動感を伝えるには、この言葉がいいだろうか、それともこの言葉がいいだろうか」と言葉を吟味しようとするだろう。言葉で表現しようとする試行錯誤を通して、子どもたちは、新たな目で作品を「見ること」となる。そして、新たな目で「見ること」をしたとき、本作品は、子どもたちにとって言

葉で表現しがいのある魅力的な作品であると言える。

(5) 追求の記録、最終追求を行う (①②③④)

子どもたちがこれらの活動をする中で、考えることと言葉を選ぶことを往還しながら、自身の言葉選びの特徴や視点を自覚したり、言葉の伝わり方を実感したりすることで、よりいっそう言葉を見つめることを促したい。そのために、自分の考えを形成する場面においても、音声ガイド制作をする場面においても、毎時間、自分の思考をふり返る追求の記録を書きまとめていくこととする。どんな言葉選びに頭を悩ませたのか、どんなことにこだわって言葉を吟味したのかを子ども

たちはふり返るだろう。

そして、題材の最後に、それらを通して何を考えたのか、言葉への見方がどう変わったのかなど、最終追求として書きまとめることとしたい。それにより、子どもたちが言葉を見つめ、言葉に対する見方や考え方が豊かになり、「豊かな言語感覚をもつ人」へとつながっていくことを期待する。

そして、「豊かな言語感覚をもつ人」は、言葉を通してその心のあり様も豊かになり、自分の行動や世界の見え方までもが変わってくるだろう。豊かな言語感覚をもった子どもたちが、彩り深い人生を歩んでいくことを願う。

9 予想される子どものあらわれ

時数	活動、問い	子どものあらわれ
1～2	<p>題材との出会い</p> <p>【普段から視覚情報に大きく頼っていることや視覚情報がないときには言葉が必要になることに目を向けてほしい】</p> <p>○視覚障害者の存在を知る。</p> <p>○映画の音声ガイドと出会う</p> <p>○『目の見えない白鳥さんとアートを見に行く』『目の見えない人は世界をどう見ているのか』を読む。</p> <p>○2冊の本を読んだ感想を交流し、追求テーマを決める。</p>	<p>《初読の感想『目の見えない白鳥さんとアートを見に行く』》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「見ること」は視覚だけの問題ではなく、記憶や知識などの脳の問題であるということがわかった。確かに、いい思い出に関連するものをみると、気持ちが前向きになる。 ・白鳥さんの「一直線に正解にたどり着いてしまっはおもしろくない」という言葉が印象に残った。限られた情報から想像しているのだろう。 ・目が見える人も、実はちゃんと見えていないという考えに驚いた。 <p>《初読の感想『目の見えない人はどう世界を見ているのか』》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・推論って、見えているわたしたちもしていることはあるけど、見えていない人は常日頃から高い確度でやっているのだと思う。 ・「他人の目で見ると」というのは、視覚障害者の人たちがしていることだが、実はわたしたちもしている。商品や店の口コミ、先入観、噂話なんかも関係してくるような気がする。 ・美術館職員が湖と野原を認識し間違えていた事例に驚いた。身近にもあることなのか。 <p>《追求テーマにつながっていく感想の交流》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目の見えない人に説明することで目の解像度が上がるのはなぜだろう。 ・言葉にしようとすることで、しっかり見るのだと思う。正確に伝える必要があるから。 ・でも、白鳥さんは「正しさを求めている」と言っている。それがよくわからない。「正しさ」でなければ、言葉に何を込めるのだろう。

		<ul style="list-style-type: none"> それは、「情報」と「意味」が関係しているのではないかな。言葉には正確さを入れるときとそうではないときがあるってこと。 見たものを言葉にするだけでなく、実際には見ていない風景や映像を言葉だけで楽しんでいるものもある。例えば、読書とか俳句。言葉から想像を広げていく感じ。一つの言葉から頭の中に想像が広がっていく。 こうやって考えてみると、「見ること」と「言葉」は、あまり関係の無いようなものだと思っていただけ、何かつながりがありそう。だから、このあたりを追求テーマにして読みをすすめるとおもしろそうだ。
<p>3～5</p>	<p>追求テーマ『『見ること』と『言葉』はどう関係しているのか』について考え、語り合おう 【「見ること」と「言葉」の関係性について自分の考えをもってほしい】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○テーマについて、それぞれの視点で個人追求を行う。 ○個人追求したことをもとに、テーマについて語り合う。 	<p>《「見ること」に関する追求》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目が見える人もちゃんと見えていないということが印象に残った。確かに、見えているつもりでも見えていないことがある。例えば、晴眼者が何かを見るとき、互いに共通のものを見ているのでそこで何かを照らし合わせることはない。しかし、同じところを見ていても、同じことを考えたり感じたりしているかというそれはまったく別である。 ・推理しながら見ることはとても難しそう。だけど、普段から誰しもがやっているように思う。もちろん、人によって程度の差はある。 <p>《「言葉」に関する追求》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「言葉」は他人の「見え方」に大きな影響を与える。一つの絵を何の先入観ももたずに見るのと、鮭弁やポストと言われてから見るのではやはり見え方が変わってくるだろう。 ・「言葉」を情報として受け取るか、意味として受け取るかは大事なことだ。意味も状況や相手との関係性、タイミングによって、変わってくるだろう。そう考えると、言葉を発する人も、情報だけ込めることもあれば、意味を込めることもある。それを感覚で使うこともあれば意図的に使うこともあるのだろう。 <p>《関係性に関する追求》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・川内さんは、「目の解像度が上がる」「絵を言葉にすることで自分の思考の扉がほんの少し開いたような」と言っている。確かにそれはあると思う。言葉にしようとするのは、しっかりわかろうとすることにつながり、しっかりわかろうとすることは、よく見ることにつながる。ポーッと見るのではなく、よく見ようと思って見るのである。そこに言葉は大きくかかわってくる。つまり、言葉は見ることを手助けしてくれているとも言える。 ・「他人の見方を自分で実感する豊かさ」とはどういう

		<p>ことだろう。他人の言葉によって見方が変わるの は良いことなのだろうか。わたしは、他人の言葉に左 右されずに自分の見方でしっかりと見ることも大事 だと思う。</p>
<p>6～13</p>	<p>映画の音声ガイドをつくろう 【伝えたいことを表現するためにこだわりを もってじっくりと言葉を吟味してほしい】 ○映画の音声ガイド制作者に話を聞いたり、 インタビューしたりする。 ○映画『陽なたのアオシグレ』を鑑賞し、感 想を語り合う。 ○音声ガイドの原稿をつくる。 ○音声ガイドのモニター会を行い、一度作成 した音声ガイドをブラッシュアップしてい く。 ○音声ガイドを完成させる。 ○毎時間、追求の記録を書きまとめる。</p>	<p>《映画を鑑賞し、感想を語り合う場面》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 勇気をもって前を向く陽なたのおかげで、観ている こちらもさわやかな気持ちになれる。最後の曲がか かってからの場面は、観ていてワクワクするくら いの躍動感があった。 ・ なぜ、陽なたは最後に「好きです」ではなく、「元気 でね」と伝えたのだろう。 ・ 現実と妄想を行き来することが多くて、音声ガイド で表現するとなると難しそう。 <p>《音声ガイドの原稿を作る場面》</p> <p>〔言葉の吟味〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ この作品において、鳥は大切な存在だ。だから、時 雨のスワンのキーホルダーがアップで映し出される 場面には意味がある。そこはしっかり伝えたい。「時 雨のランドセルについているスワンのキーホルダー がズームされる」という音声ガイドを入れよう。 ・ 確かに、スワンのキーホルダーは大事な要素だ。だ けど、「ズーム」という言葉を使うのには反対だ。そ れまでせっかく物語の世界に入り込んでいた人が、 「ズーム」というカメラワークの言葉を聞くことで、 物語の世界から外へ出てしまう感じがする。「陽なた の視線が時雨からスワンのキーホルダーに向けられ る」の方がいいのではないだろうか。 ・ 確かにその通りだ。カメラワークでズームしている ことは確かだけど、「陽なたの視線」の方が観ている 人は自然と観ることができる。それに、陽なたの意 識がキーホルダーにいつているというのも伝わって いいと思う。 ・ 限られた時間でどのくらいの情報を入れるか悩む。 何回か花が咲く場面があるが、すべての花の色や種 類、一緒に出てきた鳥の種類なども細かく説明した ほうがいいのだろうか。 ・ すべて説明していたら、観ている方も疲れてしま うだろう。陽なたの中で時雨への気持ちが高まるた びに、花が咲いていく。だから、毎回細かく説明す るのではなく、最初の花が咲く場面で、「陽なたの気 持ちの高まりとともに花が咲く」とガイドをつけ、そ れ以降は、花が咲く音が同じだから伝わるだろう。 ・ 最初に気持ちの高まりを言うってしまうのはどうな のだろう。言わないほうがいい気がする。「花が咲く、 また花が咲く」と繰り返し、最後に、「気持ちの高ま

		<p>りとともに咲いた花……」みたいな感じでガイドするのがいいと思う。そこで聞いて、それまでの花の意味がわかるみたいな。</p> <p>【大切にしたいことや視点について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鑑賞者が楽しめるのはどんな音声ガイドなのだろう。 ・わたしは、映ったものを丁寧に細かく説明することを心がけた。花が咲く場面も、何色のどんな種類の花なのか、そこにいる鳥はどんな姿形、種類なのかを説明したい。 ・丁寧に説明しすぎるのはどうなのだろうか。わたしは、観ている人が想像しやすいことを心がけた。想像しやすいというのは、適度に説明することだと思う。情報が多すぎると観ていて苦しくないだろうか。 ・それには賛成。逆に自分は情報を必要最低限しか入れなかったけど、少なすぎるようにも感じる。だけど、主観は入れたくない。でも、どこまでが主観で、どこまでが客観なのかは線引きが難しい。 <p>《モニター会の場面》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必要最低限の言葉で相手にその場면을想像させている音声ガイドがとても聞いていてわかりやすかった。細かく説明することで想像の妨げになっている部分があった。 ・躍動感を表現する言葉として、「躍動感」という言葉を直接的に使うことはやめたほうがいい。聞いていてなんだか違和感があった。その場面の状況をとらえ、「ものすごいスピードで」とか「羽をはばたかせながら」などの言葉に置き換えられないだろうか。
<p>14～15</p>	<p>最終追求をしよう</p> <p>【語り合っ考えたことや言葉をじっくりと吟味したことをふり返りながら、言葉を見つめてほしい】</p> <p>○文章を読んで語り合ったことをもとに考えたこと、音声ガイド制作をしたことを通して、「言葉の価値」について、最終的な自分の考えを書きまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の学習を通して、わたしは「見ることと言葉の関係」について二つのことを考えた。 <p>まず、見えるものをもとにして言葉にするということについてだ。見えるものを言葉にすることは難しい。なぜならば、見えた気になっていたけど、実は見えていなかったものが存在するからだ。言葉にすることでそれに気づくことができる。『白鳥さん……』でも、著者が白鳥さんに説明することで目の解像度が上がると言っている。ただ見るのと言葉にするために見るのとでは見方が変わってくる。実際に、音声ガイドを作ったときも、何気なく見ていたときには見えていなかったものがたくさんあった。例えば、タイトルであるアオシグレと関連する水滴や雫が多く出ていることに初めは気づかなかった。しかし、各シーンの景色を言葉にしようとしたとき、その水滴や雫の描写が多いことに気づいた。他にも、いざタイトルバグを言葉にしようとしたときに、初め</p>

	<p>て小鳥や虫が描かれていることに気づいた。つまり、見る(見えた気である)→言葉にしようとする→しっかり見ることができる、ということである。見えるものをもとにして言葉にすることで、まさに目の解像度を上げることができるのである。</p> <p>次に、言葉によって見るということについてである。これはわかりやすく言えば、『世界をどう見ているか……』に書かれていた「他人の目を通して見る」ということである。視覚障害者は視力がないため、他人の目で見えたものを言葉として耳で受け取り、一つの言葉からイメージを膨らめて見ている。しかし、これは視覚障害者に限ったことではない。晴眼者であっても、言葉によって事前の情報が入ってくると、見えるものが変わってくる。例えば、『世界をどう見ているか……』では、鮭弁の例が挙げられている。他にも、日常生活で誰かの言葉を受けることで、見ているものの印象が変わることはある。また、言葉から絵や映像を作り出し、頭の中で見ているものとして、小説、俳句がある。読み手は言葉を通して頭の中に映像をつくり、見ることになる。まさに、目ではなく言葉によって見るという行為をしている。</p> <p>このような「見ることと言葉の関係」から改めて言葉の価値について二つのことを考えた。</p> <p>一つめは、わたしたちは、その言葉に込めているものがあるのだということである。それは人によってもタイミングによっても目的によっても違う。例えば、ただただ正確で客観的な「情報」を込めることもある。アナウンサーの読むニュース原稿だったり、事務連絡をする帰りの会の伝達放送だったりこれがこれだ。他には、相手に伝えたい自分の「気持ち」を込めることもある。例えば、「ありがとう」と伝えたいとき、状況にもよるが、気持ちを込めている人が多いだろう。「ありがとう」に「情報」を込めるか、「気持ち」を込めるかによって、受け手の思いは変わってくるだろう。また、言葉に「意味」を込めることもあるだろう。小学生のときに、よく担任の先生から「まっすぐ家に帰りなさい」と言われた。そこには、曲がらずにただただストレートに帰るということではなく、寄り道は危険であるから決められた通学路で帰りましょうという意味が込められていた。</p> <p>二つめは、表現する言葉選びにこだわることで、与える影響は大きく変わるということである。「情報」を伝えたい場合、長くただらと説明するよりも、精選された短くて的確な言葉の方がいいだろう。相</p>
--	---

		<p>手に物語の世界に浸ってもらいたいときの言葉選びも大切である。音声ガイド制作したとき、ある場面で、鍵となるスワンのキーホルダーがズームで映し出される場面があった。その場面について、班で議論になった。そこで、「ズーム」という言葉を使ったら、観ている人は冷めてしまう。「陽なたの視線はスワンのキーホルダーに向けられた」などの表現であれば、スワンのキーホルダーが大切なものであることが自然と伝わり、観ている人は、物語の世界に入り込んだままでいられる。このような言葉選びは、音声ガイドという限られた場以外でも言えることだと思う。たった一つ言葉選びを大切にすることで、受け手の気持ちやその場の雰囲気は変わってくる。</p> <p>言葉は、これだけ多様な役割を担っていて、とても大切なものであり、とてもおもしろいものだと気づいた。しかし、その言葉を使いこなすことがこれほどまでに難しいことや、人によって使いこなせる程度が違うことも実感した。これからも言葉とともに生きていきたい。</p>
--	--	---

参考文献：伊藤 亜紗（2015）『目の見えない人は世界をどう見ているのか』 光文社新書
 川内 有緒（2021）『目の見えない白鳥さんとアートを見に行く』 集英社
 末永 幸歩（2020）『13歳からのアート思考』 ダイヤモンド社
 浜本 純逸（2011）『国語科教育総論』 溪水社
 平塚千穂子（2019）『夢のユニバーサルシアター』 読書工房

参考資料：シネマ・チュプキ・タバタ公式サイト
 (<https://chupki.jp/>)
 シマネシネマオノザワ公式サイト
 (<https://onozawacinema.com/>)
 Palabra株式会社公式サイト
 (<https://palabra-i.co.jp/>)
 UDCast公式サイト
 (<https://udcast.net/>)
 NHK『ハートネットTVフクチッチ』
 (https://www2.nhk.or.jp/school/watch/bangumi/?das_id=D0005170810_00000)